

概念体の構造 (5)

— 経済哲学のための構想 —

浦 上 博 達

私たちの 19 世紀を特徴づけるのは、科学の勝利ではなく、科学に対する科学的方法の勝利である。

ニーチェ『権力への意志』より⁽¹⁾

科学者は、外部世界の実在の姿を漸次あらわにする研究方法を案出したと思われるだけでなく、科学的知識が、社会的ないし個人的影響による歪曲から例外的に自由となっているような、適切な形式の社会的組織を進化せしめたとも思われる…… マルケイ『科学と知識社会学』より⁽²⁾

目 次

第 I 章 予備的考察

第 1 節 認識の「性質」問題

第 2 節 概念体の構造

1. 概念体の三層構造
2. 相互作用 (以上, 第 18 号)

第 II 章 三つの概念世界

第 1 節 意義の世界

1. 「意義」について
2. 形而上概念とは (以上, 第 19 号)
3. 形而上概念の要請
4. 形而上概念の役割
5. 共同体紐帯概念としての形而上概念 (以上, 第 20 号⁽²⁾)
6. 形而上概念の形成 (以上, 21 号⁽³⁾)
7. ヘゲモニー的形而上概念の衰退 (以上, 本号)

第 2 節 論理の世界

第 3 節 経験の世界

第 III 章 三つの概念世界の相互作用

第 1 節 意義の世界から

第 2 節 論理の世界から

第 3 節 経験の世界から

【「新しい発見」は形而上概念に関わることである】「新しい発見」とみなされる営為は、説明もしくは予測に失敗したデータを契機とするが、データそれ自体の新しい存在の発見ではない。このことは、発見という営為は存在論に関するのではなく認識論に属するからである⁽⁴⁾。発見は、認識行為における新たな概念枠組みの登場なのである。データに対して「その説明で十分である」とか「その予測で事足りている」と認識されている状態においては、「発見」は生じない。

だからといって、そのような説明や予測に失敗したと認識されたデータをいくら集積しても、そこから自動的に「発見」に至ることはない。説明や予測に失敗したという認識が、説明や予測に成功したという認識に変わることが「発見」なのである。これはたんなる「解釈」の変化ではない。つまりそれは新たな世界の見方の出現なのである⁽⁵⁾。この「解釈」との相違は微妙ではあるが、認識論的には決定的な相違である⁽⁶⁾。この世界観の変化は、その概念体を紐帯している形而上概念の変化であり、その変化した紐帯的形而上概念を礎石としてこれまでとは異なった概念体の定立を図ることになるからである⁽⁷⁾。つまりこれまでと同じものを見ていながら、同じ対象を見ているのではない。つまり存在的には同一対象が存在しているが、同一の対象が認識されているわけではない。認識的には全く異なった対象を見ているのである⁽⁸⁾。だからといって、認識的变化がすべて「発見」と呼べるのかということそうではない。それには論理概念や経験概念からの相互作用によって彫琢された世界観という形而上概念が、新たに研究者共同体を束ねる紐帯概念となったときである。

【連続性と非連続性】我々がこれまで獲得してきた科学的知識は、連続的に得られたものなのか、それとも非連続的に得られたものなのか、についての論争は、「科学の合理性」をどこまで保持するかという重要な態度を決するため絶え間なく続けられている。「科学の合理性」を信奉する人々は、科学の連続性に進歩を見、科学知識の変化のなかに非連続性を見る人々は、進歩に対する懐疑主義者として「科学の合理性」に否定的な立場に追い込まれる⁽⁹⁾。こうした論争が発生する根は、存在論と認識論が同根であるということに基づく。つまり、問題の対象は存在論的には連続的に存在する⁽¹⁰⁾が、それを概念化して解決しようとする認識論的な作業において非連続が生じる。つまり、進歩そして「科学の合理性」とは、経験問題の解決という存在論レベルにおいて確保されることであり⁽¹¹⁾、概念問題の解決策という認識論レベルにおいては、「科学の合理性」は全面的には保証されない⁽¹²⁾。

【科学の非-蓄積的性格】「新しい発見」は形而上概念のヘゲモニー的交代であるため、「科学の進歩」についても改めて吟味する必要が生じる。通常、進歩とは、真理を得るとか真理に漸近するとか、理論の問題解決能力や予測が向上したとかその汎用性が拡大したとか、あるいは単純性・整合性・優美性など論理的にすぐれた改良がなされたときに認められる。しかしこれらの事柄は同一の概念体の内部での様相の変化を表現しているのであって、概念体そのものが異なる場合には適切でない⁽¹³⁾。というのも、認識論的には、異なる紐帯概念の概念体を概念体単位で比較することは基本的に不可能だからである。問題解決についても、概念体が異なれば問題も異なる。けれども概念体同士は比較不可能であっても、さまざまな概念体を包含した科学全体の問題解決能力は歴史的に増大している。つまり現代の我々は、以前に比べてより多くの経験問題を解決することが可能となったのである。これが、実は「科学の進歩」の意味することなのである⁽¹⁴⁾。「新しい発見」ということは、認識論的にはまさに以前とは異なる概念体の出現なのである。し

たがって「新しい発見」が「科学の進歩」をもたらしかどうかを評価するさいには、個別理論の次元でもなければ、時間的流れを含んだ理論複合体としての集合体（研究伝統）の次元でもない。科学全体⁽¹⁵⁾の経験的問題⁽¹⁶⁾の次元なのである。

7. ヘゲモニー的形而上概念の衰退

【「決定的実験」】 科学の世界における「新しい発見」はその専門分野におけるヘゲモニーの担い手の交代つまり革命を促すが、革命によってある概念体が消滅したりあるいは崩壊したりすることはない⁽¹⁷⁾。では、「決定的実験」⁽¹⁸⁾をどのように取り扱ったらよいのであろうか。またたとえ「革命」⁽¹⁹⁾が、同一の領域で支配的であった概念体が新たな概念体に代置されるといったヘゲモニー的地位の交代であったとしても、それはなにによって遂行されるのであろうか。交代を決定づける「決定的な問題」はあっても「決定的な実験」はない。ある概念体のヘゲモニー的地位が他の概念体に取り替わられるのは、その概念体では「決定的な問題」を解決できないが、競合的な他の概念体はその「決定的な問題」を見事に解決したときである。それでは、「決定的」という判断はどのようにしてなされるのであろうか。「決定的実験」とは、テストされようとしている複数の概念体が、問題解決能力あるいは論理的説明力の点で共通に「決定的」と感じている状態での実験である。しかし「重要な」実験であっても、実際にはある概念体では「決定的」と感じられていないかもしれない。とすれば雌雄を決するような「決定的実験」は存在しないし、それはただ単なる関心の違いだけに終わることもある⁽²⁰⁾。知的専門家を含めて人々が関心をもつのは、「問題」である。「決定的問題」を解決するために「実験」がおこなわれ、それが「決定的な実験」と見做されるのである。もっとも関心を引く問題を解決することは、概念体の競合状態に勝ち負けの判定を与える⁽²¹⁾。こうした問題が「決定的な問題」なのである。

【世界観としての形而上概念のヘゲモニー的地位は、交代する】 それぞれの概念共同体における紐帯概念は、「生の肯定」から発生する価値普遍性という形而上的性格を有しているため権力闘争を内包する。つまり、その概念体が、自己の存在する専門分野、あるいはときによっては社会全体の支持者をどれほど集めるかということは、紐帯的形而上概念の生来の目的なのである。多くの支持者を集めることは、その概念体の版図を拡大することであり、その分野でのヘゲモニーを掌握することにつながる⁽²²⁾。形而上概念に人々が魅了される理由にはさまざまな要因がある。真理的佇まい・経験的な問題あるいは論理的な問題を解決する問題解決力の深度と多用途・論理的な優美性や単純性・その形而上概念のもとで業績を多産できる豊穡さ・「決定的実験」の成功・社会的権力の獲得そしてときには人々の蚊柱的趣向さえ生じる⁽²³⁾。そしてヘゲモニーを獲得した形而上概念は、教科書の背後に身を潜むことになる。しかしながらこれらの魅力がその形而上概念から薄れる⁽²⁴⁾に従って、その形而上概念はヘゲモニー的地位から追放されることになる⁽²⁵⁾。

【ヘゲモニー的形而上概念は消滅してしまうことはない】 ヘゲモニー的形而上概念は、解決す

べき問題を特定化し、その解決の方法を確定し、ときには解答さえも用意するが、しかしひとたび特定の問題を提起して特定の素材に照準を合わせその方法的原理を創り出してしまったあとでは、当の素材の加工を自己目的と考え、自覚的にその形而上概念をそれ以外の経験的事象によって検証しようとはせず、それどころか、およそみずからが価値理念に依拠していることすら忘却してしまうのである。しかし無反省に利用された形而上概念の意義が経験の世界で不確かとなっていくとき、そのヘゲモニー的形而上概念は、経験的支柱を失い崩れていく。こうしてヘゲモニー的な形而上概念（世界観）は変遷するが、形而上概念は修正されるわけではない。形而上概念は他の対立する形而上概念によってのみその地位を取って代わられるのであって、対立する形而上概念とは生死を賭けた闘いを演じ、その間に妥協はない。しかしながらヘゲモニー的地位を追われた形而上概念は消滅するのではない。その残り火も消えてしまうことはなく、条件さえ整えば再度燃えさかることがある。

【形而上概念に対峙できるのは形而上概念である】 ここで共通了解の可能性という問題、つまり価値観としての異なる形而上概念をもつ主体あるいは集団同士が、互いに相手を許容できたり、あるいはお互いに共有できる新しい形而上概念（共通了解）をつくりだすことができるか、という問題には否定的な答えしかない。というのも、あるヘゲモニー的形而上概念の崩壊が始まるのは、形而上概念の地盤機能を果たす経験概念の世界でその形而上概念を支持する経験概念よりも、対立的な形而上概念を支持する経験概念の方が決定的な実用性を発揮し始めるからである。しかしながらそのような経験概念は、それがいかに強力であっても、既存のヘゲモニー的な形而上概念の地位を奪い取ることはできない。いかに経験概念の世界で反駁的な経験概念が多数存在しようとも、形而上概念は形而上概念によってしか対峙されないのである。その理由は、経験概念が概念体を統括する能力を持ち合わせていないからである。そして形而上概念こそが、自己のもっぱら全面的な承認と、自分の見解に従って概念体全体の完全な変革を、有無をいわず要求するのである。つまり形而上概念は自己の間違いのなさを自から表明しようとするのである。そしてそのような不寛容さに満ちた形而上概念は、ただ同様の性格を有した不寛容な形而上概念によってのみ破壊される。元来、世界観としての形而上概念というものは、決して他の世界観と併存しようとする意志はなく、その形而上概念が有罪なりと判定を下した状態と協働しようなどというつもりはさらさらない。特に形而上概念は、自分に敵対する経験概念に対しては脅威を感じない⁽²⁶⁾。闘う相手は自分と同じ形而上概念である⁽²⁷⁾。つまり形而上概念の意味は、けっして事物の世界から与えられ客観的に認識されるようなものではなく、それぞれの自存性を主体の側から主張するのである。そのため形而上概念は他の形而上概念との非和解的な闘争をとおして実現されるほかはない。他の形而上概念が他人にとって批判不可能なのは、われわれの形而上概念がわれわれにとって批判的でないのとまったく同等なのである。形而上概念はこうした性質を有している⁽²⁸⁾。つまり事物すべてを「生の肯定」のうちに見、すべてを「生の肯定」に帰せしめようとする

るときには、ごくありきたりの事柄のうちにも、すぐれた意味のあらわれをよみとろうとすることになるのである⁽²⁹⁾。形而上概念は、たんに「知る」という認識を超えて、概念構成によって事態を意味的に秩序づけようとする「意義」付与という機能を有しているのである⁽³⁰⁾。

〈注〉

(1) [11] <466> [下] p. 13.

(2) [10] p. 60 訳書 p. 131.

(3) 但し、最後の3つの小見出しは本号に含まれる。

(4) クーン (T. Kuhn) によれば、「コペルニクス革命は観念上の革命であった。すなわち、宇宙と人間との関係についてのわれわれ人間の概念の転換であった。」([6] p. 1 訳書 p. 13)。また同様な例を挙げれば、コロンブスが「発見」した新大陸は、その大陸の土着のインディアンたちにとっては既知のことであり「発見」でもなにもでもありえなかった。新大陸が「発見」と言われるのは、当時のコロンブスが属していた文明のなかだけのことであり、しかもその文明が有していた地理的概念枠を一変させたからである。この点、「発明」は対象物の創造を含んでいるため「新しきモノ」の存在を含んでいる。しかしながらそのような「発明」でさえ、「発明」的行為も概念から開始されるため、やはり「発明」も認識論の範疇に入る。

(5) クーンの著作のひとつは次のような言葉から始まる。「コペルニクス革命は観念上の革命であった。すなわち、宇宙および宇宙と人間自身との関係についてのわれわれ人間の概念の転換であった。」([6] p. 1 訳書 p. 13)。そして「太陽は地球に代わって惑星運動の中心となり、地球はその唯一無二という天文学上の地位を失ない、運動する惑星の一員となった。近代の天文学の主要な達成の多くはこの置換^{ちかん}によっている。したがって天文学の基本的概念の改革が『コペルニクス革命』の第一の意味となる。」([6] p. 1 訳書 pp. 13-14)。私の主張は、この「基本的概念」が(紐帶的)形而上学概念であり、それゆえに世界観である、ということである。

しかしながらこのような「革命」の第一歩は、ほとんどの場合、それが及ぼした変革の世界のなかでは小さな問題の解決から発生する。クーンによれば、コペルニクスはそれまでの天文学者の「仕事は手や足や頭やその他の部分——それらはそれぞれ立派であるがけっして一つの身体を形造っていない——を寄せ集めて、人間を作るといよりはむしろ怪物を作っている人の仕事に比較することができます。」([6] p. 139 訳書 p. 216) と考えていた。「コペルニクスが怪物を見たのは数学的な惑星天文学であり、宇宙論や哲学ではなかった。そして彼に地球を動かすようながしたのは、数学的天文学の改革だった。(略) コペルニクスにとって地球の運動は惑星の問題の副産物だった。」([6] pp. 143-144 訳書 pp. 224-225) のである。

(6) ハンソン (N. Hanson) は、「解釈の相違」を注意深く吟味しながらそれとは決定的に異なる「パターン化の相違」に行き着き、そこから「理論負荷性」を抽出する。「ここで例の“公式”を再登場させよう。『この差異は、すべての人間にとって共通に見えているものを、どう解釈するか、その解釈の差なのだ。われわれが見ているものを描くとすれば、皆同じ内容になるはずなのだから、(略) その差異は、われわれが見ているものをいかに解釈するかという点にあるに違いない』というわけだ。」([3] p. 9 訳書 p. 21)。しかしながら「人は、まず視覚的なパターンをつかみとり、それから、その上に解釈をつなげるのではない。ケプラーもティコもまさに太陽をみているのだ。それ以上でも以下でもない。(略) これはわれわれが、同じものを見ながら違った解釈を与えている、ということではない。」([3] p. 9 訳書 p. 22)。「ティコとシンプリキウスは動いている太陽を見、ケプラーとガリレオは動かない太陽を見る。」([3] p. 17 訳書 p. 38)。「だから、ティコとケプラーとは、違ったものを見ているのだが、しかもまた、同じものを見ていると言えよう。こうしたことが言えるというのも、結局のところ、彼らのもつ知識、経験、理論によっているのである。」([3] p. 18 訳書 p. 39)。「ミク

的な対象を扱う物理学者たちは、概念上の有機化に新しいやり方はないか、と探し求めるのである。それができたなら、次の段階として、新しい実体の発見がくるのである。金の鉱脈は、そのような地勢に出会ったことのない人には発見されることはまれである。」([3] pp. 18-19 訳書 p. 40)。「そこで、《見ること》は、“理論負荷的な” 試みという言い方一つの意味がでてくる。X についての観察は、X について予め持っている知識によって形成される。」([3] p. 19 訳書 p. 41)。つまり「観察者の本当のねらいは、自分の見ている観察事実を、今までにすでに確立されている知識体系という背景と、うまく合わせてみることにあるのである。こういう形での《見ること》こそ、観察の終局点である。新しい研究が開発されるのは、この手の《見ること》によるのであり、“現象的な” 《見ること》によるのではない。」([3] p. 20 訳書 p. 44)。そして「物理学は、単に、世界に対して人間のもつ諸感覚を体系的に表現するだけではない。それは、世界についてのものの考え方、概念形成の方法でもあるのだ。」([3] p. 30 訳書 p. 65)。

- 私は、ハンソンが主張する「理論負荷性」は端的に言えば「形而上概念負荷性」であると考えている。その理由は、例えば「地球が公転する」という発想は、「理論」というよりもさらに形而上学的な、「日常生活のうつろい易いできごとよりもむしろ変化のない精神界に実在を見出した」([6] p. 128 訳書 pp. 198-199) 新プラトン主義や、また太陽崇拜を背景としているからである。つまりコペルニクスが地動説を唱えた背景には、ブトレマイオス的な宇宙観において観測データの精度化と集積化が進んだための周年の数の膨大化と複雑化に対する彼の嫌悪であり、単純化を志向する過程で、純粹精神の調和的世界を追求する新プラトン主義や太陽崇拜などの形而上概念的な枠組みに、これまで「客観的」とされていたデータを当て嵌めながらより単純な体系で読み替えられていったのである。
- (7) ハンソンは、「物理科学は、単に、世界に対して人間のもつ諸感覚を体系的に表現するだけではない。それは、世界についてのものの考え方、概念形成の方法でもあるのだ。」([3] p. 30 訳書 p. 65) と述べた後、「自然哲学は、物質に関する哲学であり、次々と新たに観察される現象の一つ一つを説明のあるパターンに組み入れるための絶えざる概念枠の闘いである。」([3] p. 158 訳書 p. 323) とみている。このことをより明確に言えば、「発見」とは「紐帶的形而上概念の変化」であり、またそれにつづく新たな概念体の構築である。
- (8) クーンは、パラダイムの変換が起こると「これまでの装置で今まで見なれてきた場所を見ながら、新しい全く違ったものを見る。」([5] p. 111 訳書 p. 125) のであり、「古い対象を古い観測装置で見ながら、天文学者たちは新しいものを楽にどんどんと見付けていった。」([5] p. 117 訳書 p. 131) と述べる。
- (9) 科学知識の変化を非連続的な過程としてとらえながらも、「科学の合理性」を主張することからいくつもの矛盾を露呈した顕著な例としてクーンがあげられる。またラカトス (I. Lakatos) が、科学的事例についての実際の歴史を書くに当たって不可欠であるとした「合理的再構成」([7] p. 138 訳書 p. 198) も、そうした工夫であると私は考えている。押しなべてほとんどすべての科学哲学者と称している人々は、最終的には「科学の合理性」を信奉しているかそうでなければ擁護する。その理由は、科学的業績が「進歩」であって欲しいことと同時に、「科学の合理性」を放棄してしまうことは「暴力」に繋がるからである。それは形而上概念が、「暴力」を内包している「生の意志」によって醸成されているからである。
- (10) このような立場は、科学的作業の最終目的を「問題解き」と規定するローダン (L. Laudan) によって示されたものである。彼によれば、「連続する研究伝統の重要な結びつきを成立させているものは、基本的には、共有された経験問題なのである。科学の歴史の大部分に顕著に見られる (部分的な) 累積的特性を、科学が示そうとするのであれば、保存しなければならないものはこれらの経験的問題であり、またこれらだけなのである。」([8] p. 140 訳書 p. 186)。
- (11) ポパー (K. Popper) の「認識主体なき認識論」([16] p. 106 訳書 p. 123) になぞらえれば、「行動主体の存在する経験の世界」である。クワイン (W. Quine) は、概念枠を変えるときは、「航海しながら船を手直しする」とし、概念枠の変化を評価する我々の基準は、実在との対応という実在論的

realistic な基準ではありえなく、プラグマチックな基準であるとする。そしてそのプラグマチックな基準とは、「理論が対自然的にも間柄的にもウマク働くための『コミュニケーションと予測との有効性』に他なりません。これが〔引用者注：クワインの主張する〕『二つのドグマ』および当時の諸論文での主張のエッセンスなのであります。従って、我々が、物理的対象は信じるが、ホメロスの神々は信じていないということは、『物理的対象という神話は、他の神話よりも有効であるという点で、他の諸々の神話よりもまさっている』と認定している、という以上でも以下でもないのであります。」〔12〕 pp. 171-172)

- (12) こうした私の主張とは全く対称的な立場が主張されることがある。その代表的な主張は、ポパーの「世界3」の存在である。「世界3」は、認識主体とは独立した知識の世界であり、それは自立的に成長するとされている。従ってこの世界は、客観的認識として「科学の合理性」そのものの世界なのである〔14〕 pp. 106-152 訳書 pp. 123-217, [15] pp. 187-193 訳書 pp. 258-267, を参照)。
- (13) ローダンによれば、「クーンの場合と同じように、ラカトシュの進歩の概念は、全く経験的なものである。唯一進歩を可能にする理論の修正は、その理論が経験的に妥当であると主張しうる範囲を増大させることだけなのである。」〔8〕 p. 77 訳書 p. 104) として、「科学の進歩の尺度は増大する内容である」〔8〕 p. 232 訳書 p. 309) という暗黙の合意を批判する。そしてローダンは「研究伝統 (Research Traditions)」レベルでの進歩を提唱する。研究伝統の全体の進歩は、「その研究伝統を構成する理論の、もっとも古い組み合わせと最も新しい組み合わせのそれぞれの妥当性 (引用者注：理論が問題を解決するに際しどれだけ効果的であるか) を比較することにより決定される。」〔8〕 p. 107 訳書 p. 142) のである。なお、私が「概念体の構造」の分析としてここで扱っている「概念体」とは、個々の理論というよりもローダンの研究伝統に近い。しかしながらローダンは、経済学の分野から研究伝統の例として「経済学に於けるマルクス主義や資本主義」〔8〕 p. 78 訳書 p. 106) を挙げているが、私の分析対象である「概念体」は、経済学分野のなかでは学派に相当するため、ローダンの研究伝統よりも細分化されたものである。
- (14) ローダンは、彼の考察対象である「研究伝統」の進歩について次のような定義を与えた。「(1) 研究伝統の全体の進歩—これはその伝統を構成する理論の、最も古い組み合わせと最も新しい組み合わせのそれぞれの妥当性を比較することにより決定される。(2) 研究伝統の進歩の速度—ここでは、一定の時間幅に於る研究伝統の即時的な妥当性の変化が確認される」〔8〕 p. 107 訳書 p. 142)。このような「計量的」な定義をローダンが持ち出したのも、彼が「進歩」に対して合理的な基準を設定しようとしたためであり、その真意は、やはり「科学は合理的に進歩する」という合理主義の立場に踏み止まろうとしているからである。しかしながらローダンの計測は同一の研究伝統内での進歩であって、科学の進歩ではない。というのも、(ローダンの用いる「研究伝統」がどのような範囲まで覆っているのか判然としないが) 複数の研究伝統間の比較は不可能であるからである。例えばこれまで未解決の実際の物理学全体の問題や経済学全体の問題を解決したとき、物理学が進歩したとか経済学は進歩したとか言われるのである。進歩とは、こうして経験的問題解決のレベルにおけるプラグマティックな結果として確認できるのである。
- (15) ファイヤアーベント (P. Fayerabend) が「何でもかまわない (Anything goes)」と言ったときには、彼は近代の西欧の科学全体を一つの伝統と考えていたのである〔8〕 村上陽一郎「解説にかえて」訳書 p. 343)。ファイヤアーベントによれば、「次のことが明らかになるだろう。すなわち、あらゆる状況において、また全人類の発展のあらゆる段階において、擁護することができる原理といえば、そのようなものはたった一つしかないということが、すなわちこの原理である。anything goes (なんでもかまわない)。」〔1〕 pp. 27-28 訳書 pp. 18-17)。しかしながらこのような表現は、「『何でもかまわない』というのは断じて、わたしが御推奨申し上げる新しい方法論の一つにして唯一の『原理』などではない。」〔2〕 p. 39 訳書 [ドイツ語版] p. 81) と修正された。そして「『何でもかまわない』というのは、理性による普遍的規範と規則を信仰している伝統的合理主義者たちが、私の行う伝統、伝統間の相互作用、および伝統の変化の表わし方を指して言う時に他に言い表わし方がわからないた

め已むを得ず使う言い方なのだ。」([2] 訳書 [ドイツ語版] p.82)。

- (16) 科学の「進歩＝蓄積説」を否定するローダンの議論は、個別理論の次元から多様な理論を含むグループの次元へと階層化することによって、「進歩」を「問題解決能力の向上」と見做し、「進歩」の判断対象を「研究伝統（多様な理論を含むグループ）」に適用する。ローダンの主張を端的に述べれば次のようになろう。科学は、合理的である。そして合理的とは、最も進歩的な理論選択をすることである（[8] p.6 訳書 p.8）。つまり「進歩」とは、「合理的なもの」を受け入れることではなく、「進歩」を受け入れることが「合理的」なのである。そして「進歩」とは、問題解決の効率性である。「問題解決効率」は、一つの理論について適用されることではなく、「研究伝統」のなかでなされることなのである（但し、ローダンは、「進歩」を、物質的および精神的な生活条件の改善については考慮外とし、「認知的進歩＝科学の知的願望に関わる進歩」に限定して用いる）。ローダンの「進歩」は、つねに競合する他の理論の存在があってこそ認められることであり、それぞれの理論が有する問題解決能力によって比較されるのである。「諸理論の相対的な価値を定めるときには、未解決問題群は全く不適切となる。理論評価を目的にする際重要となるのは、必ずしも当の理論によってである必要はなく、何らかの既知の理論によってすでに解決されている問題だけである」（[8] pp.21-21 訳書 p.28）。こうして研究伝統それ自体は進歩の評価が可能とされるが、ローダンはこの論法を研究伝統間の比較にも用いる。そのため、異なる研究伝統は、「もっと核心にふれた言い方をするなら、（経験問題を含む）あらゆる種類の問題は、ある探求の文脈の内部で生起し、その文脈によって部分的に定義されている」（[8] p.15 訳書 p.18）として、それぞれの研究伝統は異なる問題を有するとしながらも、「しかし私の印象を述べると、ある一つの研究伝統に固有の問題よりも、競合する複数の研究伝統が共有する問題の方がはるかに多いように思われる。これらの共有された問題こそ、競い合う研究伝統の相対的な問題解決を合理的に評価するための基盤を提供するのである」（[8] p.144 訳書 pp.190-191 傍点は引用者による）ということを持ち出すのである。本来、研究伝統間の比較は、局所的つまり「共有された問題」についてだけは可能であっても、研究伝統全体については不可能なのである。
- (17) 理論の交代が生じたとき、交代された理論は消滅するか破棄されるべきであると主張することにおいては、多くの点で相違するポパーとクーンでも一致する。これに対してラカトスやローダンは依然として交代された理論も存続し続けると主張する。私の立場は、後者である。
- (18) ポアンカレ (H. Poincaré) によれば、「我々は皆、よい実験とわるい実験とがあることを知っている。後の方の実験は集積しても何にもならない。そういう実験を百個行なっても、千個行なっても、たとえばパストゥール Pasteur のような一人の真の達人のただ一つの仕事で忘却のうちに投げ込まれてしまうだけである。ベイコンはよくこれを理解していた（ママ）experimentum crucis（十字架による検証、決定的な実験）という語をこしらえたのはベイコンである。」（[13] p.171）。決定的な実験について現代の科学哲学論争における取り扱いの一例として、ポパーは一節を設けている（後に、そこで用いた例は誤りであったとしたが）（[14] pp.236-246 訳書 [下] pp.293-305）。またクワインは、「デュエムにとって、実験はそれだけでは決して（研究プログラムの中核のような）孤立した理論に有罪宣告をすることはできない」（[7] *f.n.* 1 p.185 訳書 注 360 p.262）という問題提起に対して次のように述べる。「周縁部での経験との衝突は、場の内部での再調整を引き起こす。いくつかの言明に対して、真理値が再配分されなければならない。ある言明の再評価は、言明間の論理的相互連関のゆえに、他の言明の再評価を伴う一論理法則は、それ自身、同じ体系のなかのもうひとつの言明、同じ場のなかのもうひとつの要素にすぎない。ひとつの言明が再評価されたならば、他の言明も再評価されなければならない。そうした他の言明は、はじめの言明と論理的に連関している言明であるかもしれないし、論理的連関そのものについての言明かもしれない。だが、場全体は、その境界条件、すなわち経験によっては、きわめて不十分にしか決定されないので、対立する経験がひとつでも生じたときに、どの言明を再評価すべきかについては広い選択の幅がある。どんな特定の経験も、場の内部の特定の言明と結び付けられているということはない。特定の経験は、場全体の均衡についての考慮を介して、間接的な仕方でのみ、特定の言明と結びつくのである。もしこうした見解が正しけ

れば、個別の言明の経験的内容について語るの誤りのもとである一とりわけ、それが、場のなかで経験に近い周縁からはるかに離れている言明であるならば、なおさらである。なお、そのうえに、経験に依存して成り立つ総合的言明と、何が起ころうとも成り立つ分析的言明とのあいだの境界を探し求めることは、愚かなこととなる。体系のどこか別のところで思い切った調整を行うならば、どのような言明に関しても、何が起ころうとも真とみなし続けることができる。周縁部にきわめて近い言明でさえ、それにしつこく反するような経験に直面したとしても、幻覚を申し立てるとか、論理法則と呼ばれる種類の言明を改めることによって、相変わらず真であるとみなし続けることができる。逆に、まったく同じ理由から、どのような言明も改訂に対して免疫があるわけではない。排中律という論理法則の改訂さえ、量子力学を単純化する一手段として提案されている。」〔18〕 pp. 42-43 訳書 pp. 63-64)。

- (19) 例えば物理学のようなもっとも科学的だとされている学問分野の歴史においても、「革命」が存在したかどうかについては合意されていない。「科学革命」は、クーンの著作『科学革命の構造』によって広く論議をよんだが、これに異を唱える科学哲学者達は多い。例えばローダンは、「クーンの分析が示すほど科学革命は革命的ではなく、通常科学は通常的ではないことを示唆する証拠が多くある。すでに見てきたように、パラダイム或いは研究伝統の概念的基盤をめぐる論争は歴史的には連続的な過程である。」〔8〕 p. 134 訳書 p. 178) と主張する。確かに私もラカトスやローダンの指摘するように、どのような専門分野であれ二つ以上の研究伝統が存在することのほうが常態であり、一つのパラダイムが単独に存在した長い時代を見出すことは難しいが、しかしそれでもそれぞれの専門分野で、長い時代にわたりヘゲモニーを有した知的共同体が存在したのである。そのヘゲモニーの担い手の交代を私は「革命」とよんでいる。
- (20) ラカトスは、決定的実験について、「われわれの考察は、なぜ諸々の決定的実験が後になって初めて決定的であると見られるか、ということの説明する。」〔7〕 p. 72 訳書 p. 226) として、後に振り返ってみて初めて「決定的」性格が明白になるような実験について述べている。
- (21) 科学の合理的モデルを構築しようとするローダンは知識社会学にはかなり批判的であるが、それでも科学者の具体的な行動を説明するさいに社会学理論が必要とされる、と述べた文脈は次のようなものであった。「ここでとり立てて有望となるものは、問題の価値づけを支配する社会的決定因子の探求であろう。というのは、この現象—他のものよりも確実に多い—は、階級、国民性、資金や他の社会的影響の圧力を受け易いように直観的に思われるからである。」〔8〕 p. 222 訳書 p. 295)。「社会的決定因子」が何か、を抽出することはかなり煩雑で恣意的な作業であろうが、「問題」に対する社会的な関心度の相違は存在し、そして知的専門家を含めて人々が「決定的」と感じている問題が存在するのである。
- (22) 真理客観主義を標榜する立場ではこうした要因からの影響を否定する。したがって、知識に社会的影響を認める知識社会学的分析を重要視しないか否定さえするため、知識社会学は正規の学問としての地位を獲得できないでいる。知識社会学の提唱者であるマンハイム (K. Mannheim) であってさえも、初期の内は新カント学派流の二元論を採用し、自然科学については知識社会学分析の適用を除外している。しかしながらマルケイ (M. Mulkey) は、科学における社会的要因を明確に認める。「かくしてわれわれは標準的科学的観の二つの基本的仮定を斥ける結論に達したように思われる。すなわち、科学が事実についてなす主張は、理論から独立なものでも、意味の上で安定したものでもない、という結論に達したのである。科学の教科書に載せられる記号がかなり長期にわたり変わらぬままであるときでさえも、研究共同体の眼にとってそういった記号の意味は、研究の解釈的脈絡が進化するにつれ、たぶん絶えざる流動の内にあるだろう。さらに、次のことが帰結する。つまり、一定の事実言明の意味は、科学共同体の異なる部分集団にとっては一たとえば研究者にとってと学校の教師にとってとは、また専門の違う成員たちにとっては、—これら社会集団がどれほど違った解釈の枠組をもって仕事をしているかに応じて、しばしば異なってくるであろう、ということである。かくて科学的事実的『基礎』は、理論依存的であり意味を変えうるだけではない。それはまた社会によっても変わり

うようにみえるのである。」([10] pp.34-35 訳書 pp.80-81)。私もマルケイと立場を同じくする。

ポパーは、知識社会学に対して批判的である。すなわち「知識社会学者は、敵対者の不同意を通常その敵対者の全体イデオロギーによって説明するのである。このような方法は操縦し易くもあれば、操縦する者たちにとってもおもしろいものでもある。しかし、彼らは明らかに合理的討議の基盤を破壊しているし、最終的には、反合理主義と神秘主義とに至らざるをえないのである。」([15] [Vol. 2] p.216 訳書 [下] p.201)。ポパーにとって「客観的」とは、「批判的討議」をおこなうことなのである。知識社会学は、「批判的討議」を許さないため弾劾されている。ポパーは、「批判的討議」を確保するためには、彼が名づけた「科学的方法の公共的性格」とよばれる二つの側面を述べる。第一は、自由な批判であり、第二は、反駁ないしは確証という経験による公平な裁決者の存在である。ここでポパーが次のように述べていることは、経済学を専門とする者にとっては意外であった。「第二に、科学者は、食い違いを避けようとする（私は読者に、近代経済学 (modern economics) の一部も含められようが、自然科学について語っているだ、という点を想起してもらいたい)。彼らは、たとい種々の母国語を使用するとしても、唯一同一の言語を話そうと極めて真剣に努力する。これが自然科学で達成されるのは、経験が彼らの論争の公平な裁決者として認められているからである。『経験』という時に私が念頭に置いているのは、『公共的』性格を持った経験のことである。」(傍点は、引用者による) ([15] [Vol. 2] p.218 訳書 [下] p.202)。私の場合は、経済学で「経験が公平な裁決者」としての機能を果たしていないことが、そして経済的「経験」が同定不能のため「公共的」でないことが、「概念体の構造」を解明したいと思った動機の一つであった。専門の中にいる者にとっては、その外にいる者のイメージはときには驚くことがある。とすれば、私にとっての自然科学は、ポパーの経済学であるかもしれない。

またポパーが知識社会学を批判するとき、「われわれは、『知識』と『意志』とはある意味でいつでも分離不可能であるが、このことが必然的に何らかの危険な錯誤を導くわけではない」([15] [Vol. 2] p.222 訳書 [下] p.205) と述べたことにはその樂觀さに戸惑いを覚える。つづけて、ポパーが、「われわれの発見の実践的適用 (引用者注：試行錯誤の方法) は、社会科学から非合理主義を除去する手段なのであって、『意志』から知識を分離するという如何なる試みでもないのである。」(傍点は、引用者による) ([15] [Vol. 2] p.222 訳書 [下] p.206) と主張することにも、社会学者の私としては同様の戸惑いを覚える。はたして、研究対象に歴史的事象を含む社会科学の分野で「試行錯誤の方法」が可能であろう。また、そもそも「錯誤」の判定は、社会科学の分野では、どのようにしてなされるのであろうか。また、「錯誤の事実」を社会学者たちは受け入れるのであろうか。

- (23) マルケイは、科学者がしばしば引き合いに出す理論的評価項目は恣意的であると述べる。「比較的一般化された、あるいは理論的な、知識=要求を査定するとき、科学者が引き合いに出す規準は多数あるようにみえる。すなわち、証拠との一致、単純性、正確さ、範囲、豊饒さ、優雅さのような規準である。これらの原理にまつわる主要な困難のひとつは、それらはそれぞれまったく違った次元に関するものだということである。そうすると、どのようにすれば科学者は、恣意的でない方法、しかも標準的科学観の要求する共通の規準を与えるような方法で、これらの原理を結び合わせることができるのか、たとえば、どのようにして正確さという条件を単純性という条件と調和させるのか。ある水準の単純性をうるために許可されるであろう不正確さは、どの程度のものか、そして何故許されるのか。このような問題は実際には確かに解決されているのである。(略) ある便宜的な水準の単純性を達成し、ある種の数学計算を容易にするために、正確さと証拠との一致とがある程度犠牲にされる、というふうにして、一般命題は述べられるのである。(略) これらの相異なる次元のあいだの均衡は、明らかに物理的世界が示すものではない。それはむしろ、時代によりまた科学者集団によって異なる規約的な協定である。このことは、(略) 解釈上の脈絡の違いに応じて違った手続きが、したがってまた違った知識=要求が、受け入れられるであろう、いう意味である。」([10] pp.52-53 訳書 pp.116-117)。

- (24) 通常の「科学哲学論争」では、この「危機」の段階で「変異事例」がその役割を果たすとされている

る。ある概念体系に対する変則事例は、外的現象界に存在し、それはまず経験概念と接触し、そこで和解しないときには論理的概念と接触し、そこでまた和解しないときには形而上概念まで進む（私の用語法では、ラカトスのハード・コア (hard core) は、形而上概念の層に相当し、防禦帯 (protective belt) は経験概念層・論理概念層に相当する）。こうして形而上概念層にまで届いた変則事例は、内的現象界の様相までも変えてしまう。形而上概念は「生の肯定」にもとづいて醸成されているため形而上概念層においては和解という解決方法はなく、そのため、「革命」が生じることになる。しかしながら、ある形而上概念がヘゲモニーを喪失する要因はもっと多様である。例えば、人々の単なる「気まぐれ」による場合もある。

- (25) 次のマルケイからの引用は、こうしたヘゲモニーの交代に社会的要因が作用することを示唆している。科学の「諸規範は常に社会的に規定されている。すなわち、それは変転する社会的状況のさなかにある行為者による解釈によって左右されるのである。どんな特殊な規範でも明らかに異なった広範囲の諸行為と両立しうることがゆえに、われわれは知識の生産をたんにある特殊な一組の規範的定式の単純な同調の結果と見なすことはできないのである。そのかわりに私が提唱したことは、科学の諸規範をば、科学者たちが自己の行為や同僚の行為の意味を話し合って取り決めるときに参加者たちが用いる用語集とみなしたほうがはるかに実情に合っている、ということであった。科学者はかなり多種多様な定式を利用し、しかもそれぞれの定式は個々のばあい融通無礙に適用されうることがゆえに、いかなる所与の行為でも常にいろいろな仕方で解釈されうるのである。さまざまな解釈のうちどの解釈が研究参加者に受け入れられるようになるかは、社会的相互作用つまり話し合いによる交渉の過程の結果によって決定されるのである。すなわち、研究者がたがいに意見を交換し合い、確信させ説得させ合いそして影響し合おうとする過程で、これら意見は修正されたり、放棄されたり、また強化されたりするのである。科学における社会的交渉についてはいまだほとんど研究されていないけれども、この交渉は研究者の利害関心、その知的および技術的立場、研究者の重要な情報や研究施設への管理能力、そして科学的権威になろうとする強い要求、といった諸要素によって影響されるように思われる。」 ([10] pp. 93-94 訳書 pp. 199-200)。

- (26) このことが、変異事例についての論議を不明瞭にする。

- (27) ヒトラー (A. Hitler) は、「世界観」(形而上概念)が有している生来の性質を熟知していた ([4] [下] pp. 120-125)。「世界観」が有するこのような凶暴性を、意識的にも無意識にも無視するとかあるいは「理性」によって解決できると信じることなく、直視することが必要である。そしてそれを防ぎえるような仕組みを社会的にはもとより研究者の世界にも構築することが求められている。ポパーの努力は、そのような方向に向けられていたのである。そしてそのような工夫は、存在的ではなく規範的なものとならざるをえない。その意味では、研究者も全面的に理性的な人間ではない。従って、ポパーの目指していた「開かれた社会」は、研究者の世界においても自然発生的ではなく、研究者が合意をしなければならぬ規範的な仕掛けなのである。ポパーは、「呪術的ないし部族的ないし集団主義的な社会のことを閉ざされた社会とも呼び、また諸個人が個人的決定に直面する社会を開かれた社会とも呼ぶことにしよう。」 ([15] [Vol. 1] p. 173 訳書 [上] p. 172) として、「集団的決定」に対して「個人的決定」を優先する。そして閉ざされた社会から開かれた社会への「移行が起こるのは、社会制度が初めて意識的に人間の作ったものとして認識され、また人間の目的の達成のための適合性という見地からそれら制度の意識的な変更が論じられるときである。あるいは問題をもっと抽象的でない仕方で述べれば、閉ざされた社会が崩壊するのは、社会秩序を見るときに超自然への畏れが能動的な干渉と個人的ないし集団的な利益の意識的追求に道を譲るときである。」(傍点は、引用者による) ([15] [Vol. 1] f.n. 6 p. 294 訳書 [上] 注 6 pp. 332-333) と述べる。ただここで、「集団的な利益」といったのは間違いである。ポパーは、プラトンをを用いて、集団の利益こそ批判の俎上にのぼせているからである。

- (28) 『『神話=フィクションの世界』像においては、それが本当に『正しい』かどうかは問題ではなく、人々がそれを共有しているということが決定的な重要事なのです。(略) ある『神話=フィクション

の世界』が共有されているかぎり、人々は『共同体』を維持することができる。共同体とは要するに、『善悪』、『聖俗』、『美醜』等々の価値を共有する人間の集まりであり、この諸価値の共有が、人間の具体的な日常生活に明瞭な『意味』と『価値』の秩序を与えるのです。(略) 要するに、『神話＝フィクションの世界』とは『具体的経験の世界』の『価値』や『意味』を一番上で吊り支える大きな基準なのです。」([19] pp. 140-141)。

- (29) 「19世紀の半ばに、ニーチェはそれまでのヨーロッパ哲学に対して、徹底的な反論を加えましたが、そのキー・ワードをひとことで言うと、『人間とは認識する生きものではなく、価値評価する生きものだ』ということになります。」([19] p. 257)。
- (30) ミーゼス (L. Mises) は、のイデオロギーが有する「力」について次のように述べる。「社会は人間行為の所産であり、人間行為はイデオロギーによって動かされている。(略) 現存しているどのような社会状態もそれ以前に考えられたイデオロギーの所産である。社会の中で、新しいイデオロギーが生まれ、古いイデオロギーに取って代われ、社会システムを変革することがある。しかし常に社会は、それより時間的にも論理的にも先行するイデオロギーの創造物である。行為は常に観念の導きを受けて、それ以前から思考によって計画していたことを実現する。イデオロギーという概念を具象化ないし擬人化すれば、イデオロギーは人間にたいして力をもっているといえよう。力とは行為を指揮する能力ないし影響力である。普通、力があるというのは一人または人間の集団のみについていうことである。したがって、力を定義すれば、力とは他人の行為を指揮する能力である。力がある人は、その力をイデオロギーから得ている。イデオロギーのみが、他人の選択と行動に影響を及ぼす力を人に与えることができる。人が指導者となることができるのは、他人を従順に言いなりにさせるイデオロギーによって支えられている場合に限る。」([9] p. 188 訳書 pp. 212-213)。

引用文献

- [1] Feyerabend, Paul, *Against Methods—Outline of an Anarchistic Theory*, NLB, 1975 村上陽一郎・渡辺 博共訳『方法への挑戦 — 科学的創造と知のアナーキズム』新曜社, 昭和56年
- [2] Feyerabend, Paul, *Science in a Free Society*, NLB, 1978 村上陽一郎・村上公子共訳『自由人のための知—科学論の解体』(原書: ドイツ語版) 新曜社, 昭和57年
- [3] Hanson, Norwood, *Patterns of Discovery—An Inquiry into the Conceptual Foundations of Science*, Cambridge UP., 1965 村上陽一郎訳『科学的発見のパターン』講談社, 昭和61年
- [4] ヒトラー (Adolf Hitler) 『わが闘争』平野一郎・将積 茂訳, 角川書店 (上・下), 昭和48年
- [5] Kuhn, Thomas, *The Structure of Scientific Revolutions* (Second Edition, Enlarged), The University of Chicago, 1970 中山 茂訳『科学革命の構造』みすず書房, 1971年
- [6] Kuhn, Thomas, *The Copernican Revolution—Planetary Astronomy in the Development of Western Thought*, Harvard UP., 1957 常石敬一訳『コペルニクス革命』講談社, 1989年
- [7] Lakatos, Imre, & Musgrave, Alan, *Criticism and the Growth of Knowledge*, Cambridge UP., 1970 森 博監訳『批判と知識の成長』木鐸社, 1985年
- [8] Laudan, Larry, *Progress and Its Problem: Towards a Theory of Scientific Growth*, California UP., 1977 村上陽一郎・井山弘幸訳『科学は合理的に進歩する — 脱パラダイム論に向けて —』サイエンス社, 昭和61年
- [9] Mises, Ludwig, *Human Action: A Treatise on Economics*, (3rd Revised Edition) Contemporary Books, Inc., 1966 村田稔雄訳『ヒューマン・アクション』春秋社, 1991年
- [10] Mulkay, Machael, *Science and the Sociology of Knowledge*, George Allen & Unwin Ltd., 1979 堀 喜望・林 由美子・森 匡史・向井 守・大野道邦共訳『科学と知識社会学』紀伊国屋書店, 1985年
- [11] ニーチェ (Friedrich Nietzsche) 『権力への意志 — すべての価値の価値転換の試み —』原 佑訳 (ニーチェ全集 第11・12巻) 理想社, (上) 昭和37年 (下) 昭和37年

- [12] 大庭 健『はじめての分析哲学』産業図書, 平成2年
- [13] ポアンカレ, H. (Henri Poincaré)「科学と仮説」(『世界の名著 66 現代の科学II』) 静間良治訳 中央公論社, 昭和45年 『科学と仮説』(岩波書店版) 河野伊三郎訳 岩波書店, 1938年
- [14] Popper, Karl, *The Logic of Scientific Discovery*, Routledge (Reprinted), 1992 大内義一・森博共訳『科学的発見の論理』恒星社厚生閣, (上) 1971年 (下) 1972年
- [15] Popper, Karl, *The Open Society and its Enemies*, (Fifth Revised Edition) Routledge & Kegan Paul, Vol. 1 Vol.2 1966 内田詔夫・小河原 誠訳『開かれた社会とその敵』未来社, [上・下] 1980年
- [16] Popper, Karl, *Objective Knowledge — An Evolutionary Approach —*, (Revised Edition) Clarendon Press, 1979 森 博訳『客観的知識 — 進化論的アプローチ —』木鐸社, 1974年
- [17] Popper, Karl, *UNENDED QUEST, An Intellectual Autobiography*, (Flamingo Edition) Fontana/Collins, 1986 森 博訳『果てしなき探求 — 知的自伝』岩波書店, 1978年
- [18] Quine, Orman, *From a Logical Point of View: 9 Logico-Philosophical Essays*, (Second Revised Edition) Harvard UP., 1961 飯田 隆訳『論理的観点から — 論理と哲学をめぐる九章』勁草書房, 1992年
- [19] 竹田青嗣『はじめての現象学』海鳥社, 1993年